

和室

—写真比較調査による現代の和室のイメージの探求—

“WASHITU”

- Study of the image construct using photos comparison -

○服部岑生*3, 鈴木雅之*2, 山岸輝樹*1

HATTORI Mineki, MASAYUKI Suzuki, YAMAGISHI Teruki

“Washitu” (Japanese Tatami room) has various characters as building, life style and design. We understand that the type of “Washitu” is not yet studied enough in term of history, definition and technology. Here is most interested the semantics of interior design in transition.

We tested what kind of impression ordinary Japanese to the stimulus of 30 photos of interior have using SD comparison method. The presented adjective pairs are adopted from the previous study (1992) They are as follows: new, traditional, bright, wide and so on, different from Ogiso’s idea (1967). The answers are 3 type people of the students, urban residents and suburb’s residents.

The 30 photos are collected among the datas shared in the internet as the photo’s archives. The Result is firstly the construct of the image is composed of “wide”, “light”, “posted” and so on.

キーワード: 和室、イメージ、暮らし、構法、SD法

Keywords: Tatami room, interior image, life style, structure system, Semantic Differential method

1. はじめに

SD法^(註1)を利用するインテリアのイメージ分析やその応用の研究は、1950年代に始まり歴史があり、有用性がある。また、必ずしも学術的に検討されておらずまた学術用語に登録がされておらず、衰退、消滅の時代にあると考えられる“和室”を対象にイメージのような文化的な意味を探求するために、SD法による心理的な定義の探求を行う。

SD法では、すでに実物と写真を手段にした際の反応差についても考究されており、十分に注意すれば客観性を損なわないとされている。そこで和室を含む多様な写真を用意し、これまでの研究成果から評価の形容詞対を精査し、さらに広く回答者の所属や年齢を多様化させ一般市民の反応を調査し、類型化して実験を行う。

研究の契機は、和室を対象にする意義について、住居で和室(畳の部屋)を建設することが、極端に減少しているにもかかわらず、和室を含む住居の意味が、あらためて検討され始めている^(註3) ことに関わっている。

2. 目的・方法

対象の和室は、概念としては20世紀半ばに使われ始めている。初出は明確でなく、明治時代に和洋折衷の住宅が建設された時に、洋室が対置された畳の部屋を指す概念であったと考えられる。それ以降、戦前期まで和室の言葉は使用されてきたが、戦後、多くの場で普及する洋室と対比され、また和室(畳室)の伝統を支持^(註2)するために意識的に使われ、収束して定着したと言える。和室の技術はすでにあつたため、技術用語として定義される必要が生じなかった。その間に和室の意味は変化し、和室の実態も変わってきている。この経緯とその結果を研究する関心が生じている。

研究の目的は、和室に関わる一般市民のイメージ構造(概念構成)および和室での生活の特徴と和室の建築的特性の関係を明らかにすることである。

(1) 調査対象

一般市民の特性を得られるように年齢層・職業・所属などの異なる3種類の調査者(SD法回答者)とし、分析は代表性を検討し学生モデルの詳細分析を行い、他の都市居住者の主婦及び郊外地方部居住者を比較モデルとする。(表1)

今回の分析では、他のモデルの回答の特性との関係性を確認した上で学生モデルを取り上げ考察した。

*1 日本大学生産工学部建築工学科, 専任講師・博士(工学)

*2 千葉大学国際教養学部国際教養学科, 准教授・博士(工学)学位

*3 千葉大学名誉教授, 工学博士

Assistant Prof. Nihon University, Dept. of Archi. Eng. Dr. Eng.
Associate Prof. Chiba University, Dept. of Inter. Edu. Dr. Eng.
Prof. Emeritus Chiba University Dr. Eng.

(2) SD法の有効性と評価項目

既往先行研究^{※1}および著者の発表研究^{※2}等でイメージ分析と設計への有効性は確認されている。先行研究のSD法で用いた評価語を参照し、イメージの語を基本とした。和室を検証する“和室”、“伝統”、“欧米”などの語を追加した(表2)。

SD法ではイメージの形容詞対が一般に使われるが、和室の建築的性能、暮らしおよび建築構法に関わる特徴を表す評価語を取り入れ、イメージの回答との関係性を分析する。辞書で「畳を敷いた日本風の部屋」とされる和室の説明に加えて伝統や欧米的などの意匠様式、広い・狭い、明るい・暗いなどの多数のイメージに関わる語で評価することとした。

(3) SD法の刺激提示写真

googleの画像およびウェブサイト“Pinterest”において和室や昭和の和室などの語で検索し、住宅の居間が中心に表現されている写真を30セット(図8)抽出した。和室の写真として、昭和時代などの古いシーンが映るモノ、小津安二郎映画のシーン、建築家の住宅作品で庶民的なシーンがある写真やフローリングによる洋室を含む外構の住宅写真などを筆者らによる抽出とブレインストーミングで選択した。提示写真は適度に「和室」が含まれたものになっている。学術的な定義がない和室のイメージを検証するので条件を厳密に出来ないこと、豪華な様子でない市民的な生活がある写真であることに注意し、また写真内容を分析するためでないことからSD法の評価に極端な影響がない暗い・汚れ・不明瞭さがない広角の写真にした。

(4) 分析手法(表3)

①最初に、因子分析によって提示する評価語の回答の関係性から潜在的な変数を探索し、はじめに和室にこだわらず住宅の室内のイメージに対する反応の因子を探索する。(表2、16変数)の評価回答(伝統を継承している?や、好きなインテリア?などの5段階評価)から、因子分析(R統計ソフト)を適用し少数の因子に絞る。

②次に、和室、好き嫌い及び得られた因子(被説明変数)の要因を探索。同時に回答される部屋の性能、暮らし、および構法の回答(説明変数)との関係を重回帰分析で探索する。和室等の対象イメージ(被説明変数)を説明変数の一次式で予測する。複数の説明変数の回答値と被説明変数の係数により、和室に高評価を与える変数を探索。重回帰分析は、和室の評価に影響を与える変数の重要性の度合いを探索し、和室のイメージの定義を探索する方法

表1 調査者等の比較

	学生モデル	比較モデル1	比較モデル2
総数	21人	14人	22人
住所	学生多様	JR稲毛海岸駅周辺	横芝光町および千葉大学学生
年齢層	20代半ば	30~50代	多様
職業等	日大学生	千葉市美浜区主婦	千葉県横芝光町 千葉大学学生・教職員

表2 評価語(参考にした用語・使用した用語)

参考にした用語		使用した用語		
文献1の用語	文献2の用語	和室を巡る用語	生活の用語	インテリアの構成の用語
快い	好き嫌い	好きなインテリア	プライバシーがある	柱が多い
上品な	くつろげる	日本の伝統を伝えている	風通しが良いイメージ	上の方に壁が多い
充実した	センスがある	欧米的	日当たりを考えたインテリアのイメージ	直線の材料が多い
まとまった	都市的な	都会的な感じ	速く景色を楽しむイメージ	窓が多い
すっきりした	新しい	開放的な感じ	庭を眺めるインテリアのイメージ	家具が多い
落ち着いた	開放的な	シンプルな感じ	絵や写真を飾る壁や床の間があるインテリアのイメージ	畳の部屋が多い感じ
立派な	シンプルである	くつろげる	花瓶や本などの置物を考えたインテリアのイメージ	床の面が多く見える感じ
親しみやすい	先進的な	やさしい	服などの収納を考えたインテリアのイメージ	
女性的な		温かい	お客をもてなすインテリアのイメージ	
暖かい		白い	家族が団らんするインテリアのイメージ	
伸び伸びした		明るい	座ったり寝転びたい感じのイメージ	
陽気な		柔らかな	椅子に座ってみたい感じのイメージ	
明るい		新しい感じ		
にぎやかな		強い感じ		
柔らかな		広い感じ		
活発な		和室		

表3 分析手法

名称	特徴
因子分析	質問項目への回答などの変数が、影響を与えている観測されない、仮定された変数を探る手法。
重回帰分析	一つの目的変数を複数の説明変数で予測する手法。
散布図	変数間の相関関係を視覚化する手法。

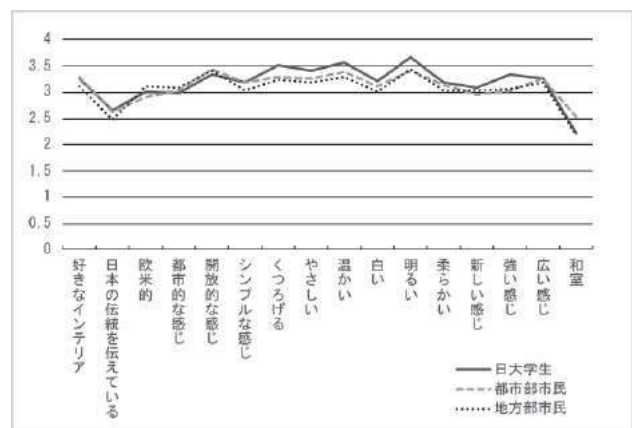


図1 和室のイメージ・プロフィール

表 4 回答平均値・標準偏差

	全イメージ 回答平均	標準偏差
好き嫌い	3.252	0.181
伝統	2.66	0.346
欧米的	3.013	0.34
都市的	2.987	0.295
開放的	3.335	0.23
シンプル	3.189	0.188
くつろげる	3.527	0.217
やさしい	3.405	0.193
温かい	3.576	0.201
白い	3.22	0.252
明るい	3.66	0.241
柔らかない	3.19	0.173
新しい感じ	3.087	0.269
強い感じ	3.327	0.158
広い感じ	3.265	0.238
和室	2.232	0.392

表 5 因子分析の変数選択

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
日本の 伝統	欧米的	都市的 な感じ	開放的 な感じ	シンプル な感じ	くつろげ る	やさしい	温かい	白い	明るい	柔らかない	新しい 感じ	強い感じ	広い感じ
			日本の 伝統	開放的 な感じ	シンプル な感じ	温かい	白い	新しい 感じ	強い感じ	広い感じ			
			1	2	3	4	5	6	7	8			

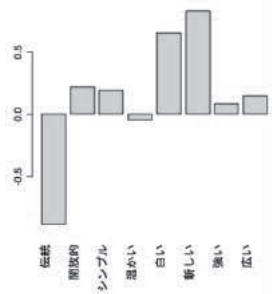


図 2 第 1 因子負荷量

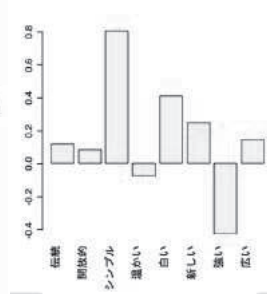


図 3 第 4 因子負荷量

表 6 8変数4因子・因子分析

まとめ	評価	第 1 因子	第 2 因子	第 3 因子	第 4 因子
新旧	新しい	0.832	0.37		0.25
	日本の伝統	-0.882	-0.145	0.191	0.119
	白い	0.656			0.413
広い	広い	0.146	0.923		0.148
	開放的	0.224	0.822	0.126	
温・強	温かい		0.292	0.95	
	強い		0.219	-0.66	0.426
シンプル	シンプルな	0.191	0.255	0.1	0.805

である。

(5) イメージの平均 - 学生モデルの代表性の確認

和室に関する回答の調査者別のイメージ・プロフィール(図 1)は、特に差が大きくないので、学生もモデルを 3モデルの代表として、分析は学生の回答データを中心に分析する。

和室に関するイメージ評価の 16 項目について、回答の平均値と標準偏差は、表 4 の通りであり、偏差の大きな項目は言葉の意味に個人差があると考えられる伝統、欧米的、都市的、および和室の回答である。この評価語の関係について、後に検証する。

3. 因子分析

変数と因子の設定を変え、3段階の分析を行った。

(1) 14 変数 4 因子分析 (表 5)

好き嫌い・和室 2 変数を除く 14 変数を前提に、最少の 4 因子で説明の程度を探った。第 4 因子の相対的に大きな変数が評価語の意味で調和しない点から、4 因子以上の検討を行うことにした。累積因子負荷量は 0.803 であった。

(2) 8 変数 4 因子分析 (表 5、表 6)

相関性高い変数を除き、曖昧さがある変数を残し、8 変数として 4 因子の分析を行った (図 2 および 3)。

その結果、部屋のイメージについて、第 1 因子として「新旧感覚」(寄与率 0.252)、第 2 因子として「広さ感覚」(寄与率 0.236)、第 3 因子として「柔さ・強さ感覚」(寄与率 0.176) および第 4 因子は「シンプル感覚」(寄与率 0.139) が累積負荷量で 0.803 のイメージの内容で

あることが分析された。(表 6) 第 4 因子に負荷量の高い変数が割れており問題が残った。写真サンプルの因子得点を、第 1 因子および第 2 因子の座標に変数とともにプロットした (図 4)。伝統を維持しているとして高い値で評価された部屋、反対に欧米的な高い評価の部屋が左右に、吹き抜けや奥行き長い空間がある部屋は、広さの評価軸の上下にプロットされた。しかし、原点の右上部分 (第 1 象限) には変数が密集し第 3 因子と第 4 因子の区別が付きにくい場所にフローリングが使われた部屋が多くあり、因子分析の明快さが無いところと重なっている。

(3) 16 変数 6 因子分析 (表 5、表 7、図 5、6、7) そこで相関性にこだわらず変数と求める因子数を 6 に増

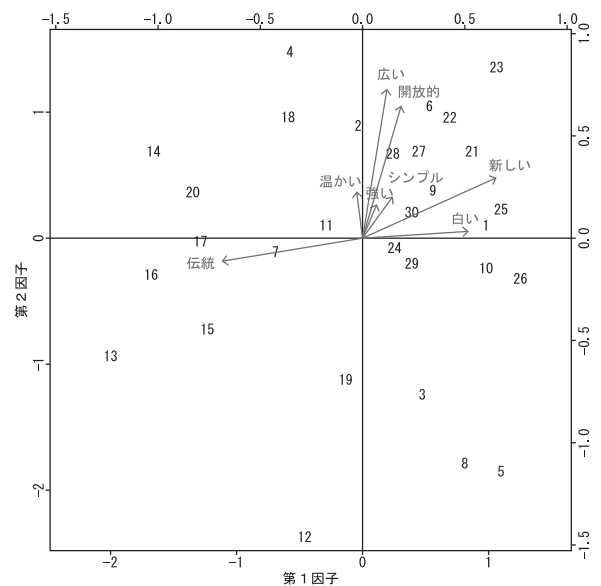


図 4 1・2 因子座標軸 8 変数・因子得点

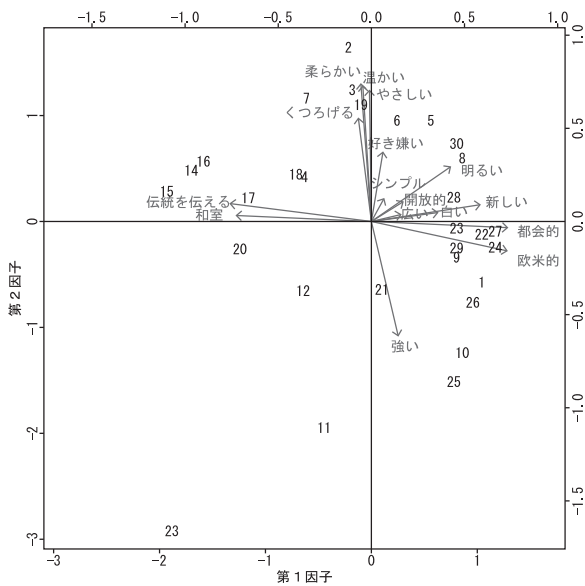


図5 1・2因子座標軸14変数・因子得点

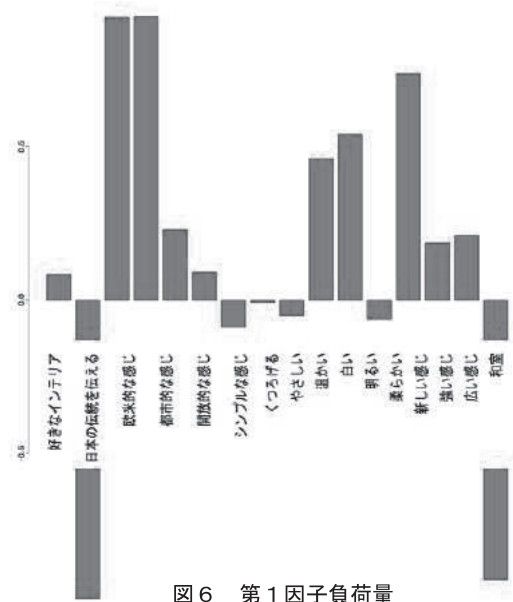


図6 第1因子負荷量

表7 因子分析結果

	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	第6因子
因子負荷量の二乗和	4.687	4.088	2.771	1.394	1.08	0.153
因子寄与率	0.293	0.256	0.173	0.087	0.068	0.01
累積因子寄与率	0.293	0.548	0.722	0.809	0.876	0.886
因子数の十分性	χ ² 統計量=34.97 (自由度 39)		P-値=0.654			

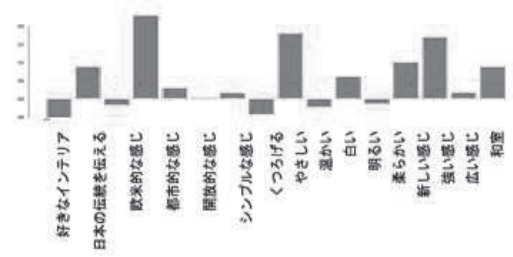


図7 第6因子負荷量

やし、因子の意味を検討した。必然的に対象の変数を16に増やし分析した。その結果、部屋のイメージについて、第1因子として「新旧感覚」(寄与率 0.293)、第2因子として「広さ感覚」(寄与率 0.256)、第3因子として「柔らかさ・強さ感覚」(寄与率 0.173)、第4因子は「明るさ感覚」(寄与率 0.087)、第5因子は「シンプル感覚」(寄与率 0.068) および第6因子は「都市・暖かさ感覚」(寄与率 0.010) が累積負荷量 0.886 で説明が十分なイメージの内容であることが分析された。(表5、図5、6)

図5に、因子と因子得点のプロットを行った。先のプロット図(図4)と同様な構図になっており、→線は8変数の位置を示し、提示写真の位置は写真番号で示す。明るさと強さの変数が独立した位置の→線となる。強さの対極には温かい・柔らかいがプロットされている。好き嫌いの変数と和室の変数の→線は、相関性が高い、くつろげる変数と伝統を伝える変数と近接している。

変数と写真の因子得点のプロット(図4及び図5)において、写真がどのように分類されたかを考察する。プロット図は、第1因子(y軸)第2因子(x軸)の右側に欧米的・伝統を継承しない特徴の範囲があり、左側に和室が位置を占める構図になっている。y軸の上側は、広い・開放的・温かい・柔らかいなどの変数の領域である。和室が特徴の民家風の部屋(14-提示写真番号、以下省



図8 14変数6因子・因子得点の因子第1・第2平面へのプロットに対応する提示写真事例

図8 図5のプロットに対応する提示写真事例

略)、座敷(15、16)が左側、昭和時代の部屋(12、13)が第3象限、欧米の部屋(24、25、26、27、28、29、30)が原点に近い第1象限に配置されている。図8(写真中の番号は提示写真番号)で、プロット図に近い位置で右から欧米的な写真、左に和室を評価された事例を示したので参考にする。

4. 言葉の意味の関係

因子分析のみでは複数の変数の反応の関係で日本語の意味が相反するなど理解できなかった変数を散布図により相関分析する。散布図は、対角線で線対称になって居り、各マスに変数の評価の値の対がプロットされている。(例、左上隅を原点にして伝統-欧米の関係は縦2番目×横3番目のマスで点がほぼ直線的に分布し、反比例の関係と読める。)

(1) [好き嫌い、日本の伝統を継承している、欧米的、和室]の相関性 (図9)

変数[伝統][欧米]および[和室]は、比例あるいは反比例的な分布となり、第1因子において高い値の因子負荷となっていることに通じている。好き嫌いの変数は、それに対して相関性が見られない。先に見た回答の標準偏差が高い評価語であるが、評価の判断に個人差があるが、伝統・欧米・和室の3語は、分散においては回答の間に比例関係が見られる。これらの3語と、好き嫌いの間には比例関係は見られず、その他の変数が関係に加わっていると考えられるが、標準偏差(表4)は他と比べ小さく評価の決定は、ハッキリと行われていると思われる。

(2) [温かい、やさしい、柔らかい、くつろげる]の相関性 (図10)

これらの4語、特にくつろぐ言葉を除く3語には、いずれも正の比例関係が見られる。しかし、言葉の微妙な意味の違いを、4語の回答から読み取ることが難しい。今回の分析では、最初の分析として「温かい」を取り上げ、代表させることにした。

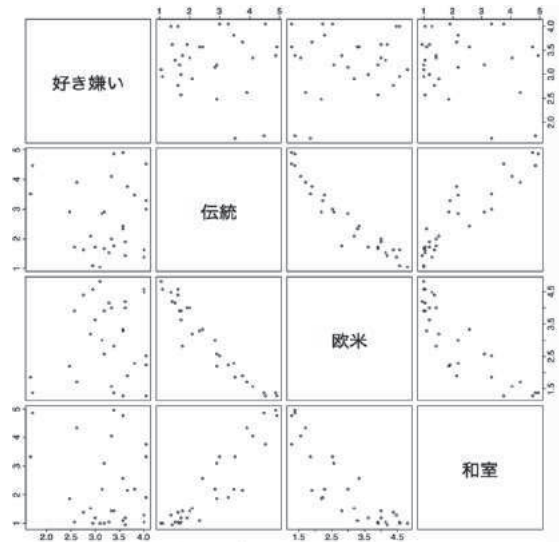


図9 和室等の4変数の散布図

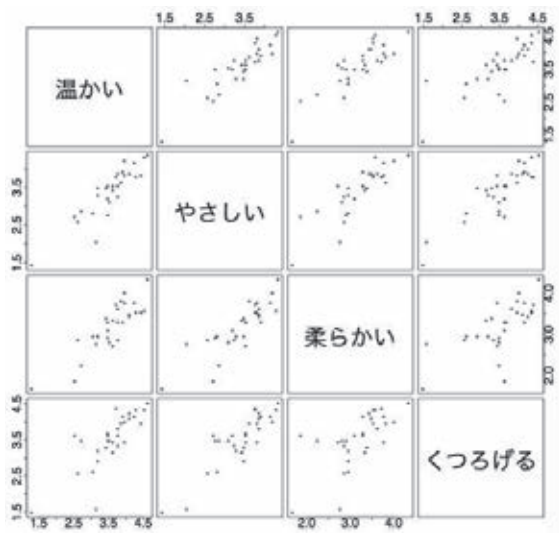


図10 温かい等の4変数の散布図

5. 和室と他の評価との関係

次に、[和室および好き嫌い]の評価と「和室の建築的性能、暮らしおよび建築構法に関わる特徴を表す用語」(表2右側列)による質問項目の重相関分析により、和室や好き嫌いをどのように説明できるかを分析した。

(1) 和室と部屋の性能・暮らしの関係 (表8)

和室の評価の高低は、風通しが良い、お客をもてなす感じ(接客)、プライバシーがある、花瓶や置物を考えたインテリアと、正の相関が高い。また日当たりが良い、椅子に座っていたい感じと、負の相関が高い。概ね、常識的な関係だが、日当たりが良くないことが和室と相関している点を、創造的に推理すると、茶室や北側座敷を前提にしていると思われる。

(2) 部屋の好き嫌いとの性能・暮らしの関係 (表9)

表8 重回帰分析 1

Y	残余	X1	X2	X3	X4	X5
和室		プライバシー	風通し	日当たり	遠くの景色	庭
係数等	-1.2142	0.5821	0.9498	-0.9479	-0.1621	0.2733
X6	X7	X8	X9	X10	X11	X12
絵を飾る	花瓶・本	服の収納	接客	団らん	寝転びたい	腰掛けたい
-0.1081	0.476	0.1881	0.7434	-0.2729	0.264	-0.8514

(重相関係数²=0.849 自由度調整相関係数²=0.7424)

表9 重回帰分析 2

Y	残余	X1	X2	X3	X4	X5	X6
好きなインテリア		広い感じ	プライバシー	風通し	日当たり	遠くの景色	庭
係数等	-1.4491	0.3238	0.3238	-0.4375	0.3428	-0.0977	0.2265
X6	X7	X8	X9	X10	X11	X12	
絵を飾る	花瓶・本	服の収納	接客	団らん	寝転びたい	腰掛けたい	
-0.2998	-0.1017	0.4507	0.3492	-0.1015	0.1842	0.340	

(重相関係数²=0.724 自由度調整相関係数²=0.4997)

部屋の好き嫌いの評価の高低は、和室の評価と比べ、大きな影響を与える変数がない。中でも正の相関があるといえるのは、プライバシーがある、服の収納を考えた、お客をもてなす感じ、広い感じの変数が挙げられる。負の相関では、風通しが良いと、「絵や写真を飾る」の変数が上げられるが、理由を想像しにくい。

6. 写真サンプル・質問ごとの回答プロフィール

写真サンプルごとに、和室に関するイメージ(表3)の質問への回答(評価)について検討する。

(1) 現代の部屋と想定した4写真について(図11、下部)

広いフローリングを縁側のようにしつらえ外を見る配置のソファがある部屋(縁側リビング)、洋室にこたつを置き談笑する人がいる部屋(洋室こたつ)、3LDKなどのマンションのフローリングの部屋(マンション)、および広いワンルームにした居間とDKで子どもが寝そべて本を読む部屋(フローリング)の4事例(図12、下側、番号は表3参照)で、評価は右下がりあるいは右上がりの回答が多い。フローリングの部屋への回答などで傾向が変わる質問は、新しい(5、写真番号以下省略)、明るい(11)、広い(15)などでの回答が上げられる。

(2) 昭和の特徴の部屋の3写真について(図11、13、グラフ番号は表3参照、写真、図12上部)

写真は、卓袱台(ちゃぶだい)や箱形テレビなどのある部屋(茶の間)、清家清自邸、小津安二郎映画の茶の間への回答を考察した。好き嫌い(1、写真番号以下省略)、[茶の間]が評価が高く、伝統を生かす(2)欧米的(3)、和室(16)などで理解できる結果となっている。シンプル(6)、開放的(5)で、類似の結果が出ている。

7. 回答者の写真サンプル別の集団差

調査者として学生(日大)、主婦(千葉市)、市民(横芝光町)の3種類(表1)で調査を行った。詳細な検討分析は今後行うが、回答の集団ごとの差を、特に和室の評価の平均値が最大と最少の回答となった写真サンプルを対象に検討した。

学生の最大は写真16、最少は27(図14)、主婦では最大は15、最少は28(図14)であった。

比較として、和室の回答平均が最大最少の写真については理解できるとともに、両者は、類似の画像であり評価が同じ意味であると考えられる。和室の回答と相関する2、3の回答も、同様に理解できる、他の回答も近似



図11 現代及び昭和の写真

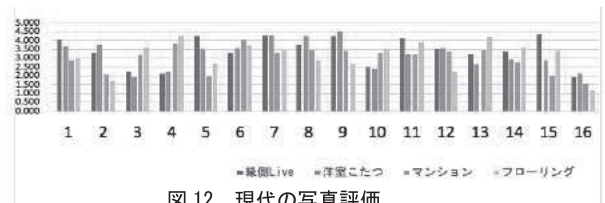


図12 現代の写真評価

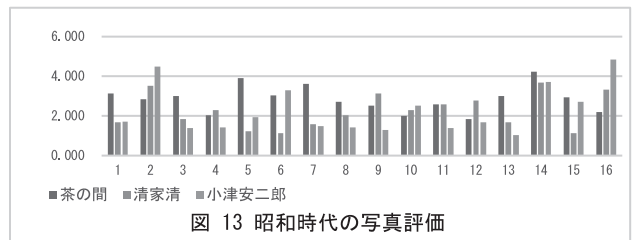


図13 昭和時代の写真評価



図14 最大・最少回答の写真

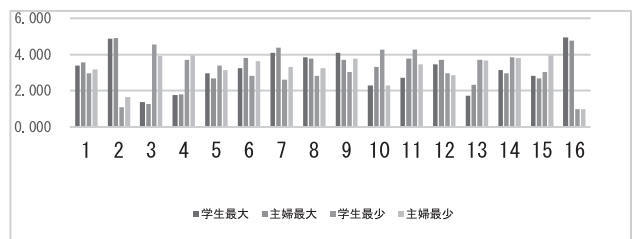


図15 調査者別の回答の差

している。(図 15、番号は表 3 参照)

以上から、さらに今後の分析を待つものではあるが、調査者による回答の差は、必ずしも大きいものでないと考えられ、調査者はすべて日本人であるから、和室に関するイメージのあり方が、日本人にとって、共通性を持っていると考えられる。

8. 和室の定義・設計の立場から考察

和室のいわば定義を行う研究として、SD 法の評価語による記述を試みる。様々な前提が考えられるので、和室を被説明変数として、説明変数を 4 種類取り上げ考察した。和室を設計する前提で考察すると興味深い。

(1) 和室とイメージに関する評価語から (表 10)

和室として評価される写真は、強い、新しい、やさしい、都市的、開放的は負の評価で、白い、くつろげる、広い、温かい、の評価が正の評価である。理由は多くが理解できる。和室が白いかどうか、小さい係数だが開放的でなく広いと言う評価は必ずしも理解が容易でない。設計時の想像力を刺激する。

(2) 和室と部屋の構法から (表 11)

部屋の構法のあり方では、畳があることが最も影響しており、次いで柱が見える項目の影響が強い。家具がないことは理解できる面があるが、直線の部材がマイナスの影響があることが理解しにくい。

(3) 和室と暮らしの特徴から (表 12)

暮らしと部屋の性能では、プライバシーがある、寝転べる庭が見えるが高い影響を与える。家族団らんはマイナスであり、理解できる。

(4) 和室とイメージ・構法のまとめから (図 16、表 13・14)

重相関係数の点では、畳があることとで相関が高くなる。和室かどうかで、畳あればよいという結論になりかねないが、畳を入れない回帰分析では、開放性の影響が逆になり判断がむづかしい。

被説明変数[和室 Y]とイメージ・構法の設計で前提にすることのある変数を散布(図 16)すると、和室と畳(X4)は高い相関、柱が見える項目(X3)は関係が見えにくい。開放的(X1)、明るい(X2)も、比例関係などは見えない。

9. まとめと考察

(1) 得られた成果のまとめ

部屋の多様な写真を見て和室かどうかのイメージを探る SD 法から、評価の因子を探るとともに部屋の性能

表 10 重回帰分析 3

切片	内容	正の係数	内容	負の係数
		9.3049		
1	白い	0.6447	強い	-1.0679
2	くつろぐ	0.4453	新しい	-0.8859
3	広い	0.4153	優しい	-0.5974
4	温かい	0.3888	都会的	-0.5719
5	シンプル	0.0099	開放的	-0.2095
6			明るい	-0.0141

表 11 重回帰分析 4

$$\text{和室} = 1.73 + 0.268 \times \text{柱が見える} + (-0.007) \times \text{上部の壁} + (-0.106) \times \text{直線の部材} + 0.069 \times \text{窓がある} + (-0.356) \times \text{家具がある} + 0.884 \times \text{壁がある} + (-0.178) \times \text{床が見える}$$

(重相関係数²=0.9438 調整相関係数²=0.9259)

表 12 重回帰分析 5

$$\text{和室} = 0.294 + 0.984 \times \text{プライバシー} + 0.403 \times \text{庭が見える} + (-0.079) \times \text{絵や写真を飾る} + 0.079 \times \text{衣服の収納} + (-0.639) \times \text{家族団らん} + 0.709 \times \text{寝そべる}$$

(重相関係数²=0.5539 調整相関係数²=0.4375)

表 13 重回帰分析 6

$$\text{和室} = 2.322 + (-0.769) \times \text{開放性} + (-1.733) \times \text{明るさ} + 2.758 \times \text{柱が見える}$$

(重相関係数²=0.447 調整相関係数²=0.3832)

表 14 重回帰分析 7

$$\text{和室} = 0.022 + 0.022 \times \text{開放性} + 0.259 \times \text{明るさ} + 1.950 \times \text{柱が見える} + 12.991 \times \text{畳がある}$$

(重相関係数²=0.9287 自由度調整相関係数²=0.9172)

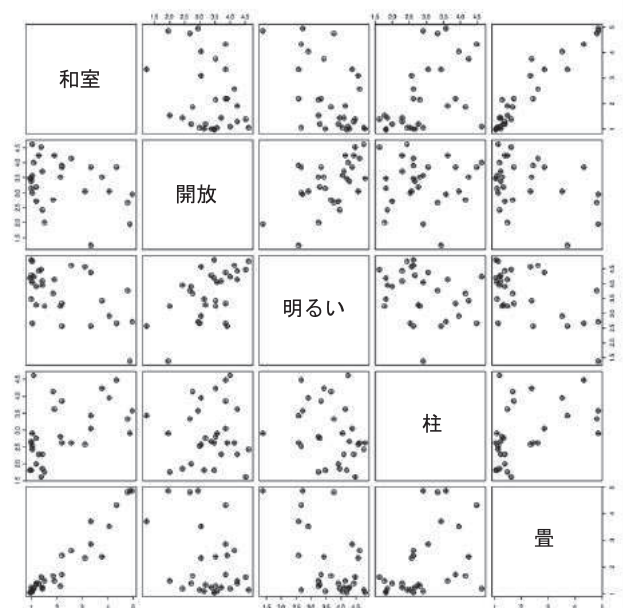


図 16 和室と 4 変数の散布図

(日当たり・風通しなど)、暮らし(景色を見る、庭を楽しむ、お客をもてなすなど)、および部屋の構法(作り方・あり方として柱が多い、畳の部屋が多いなど)の質問項目の回答(写真の部屋の特徴の評価)との多重回帰分析で現代の日本人が、和室をどうイメージしているか、その評価の根拠として性能・暮らし・構法の条件が何かを、以下の様に明らかにした。

- 1) 評価のイメージ因子として[新旧、広さ、柔らかい、シンプルさ]を中心とするイメージが得られた。
- 2) 和室の性能・暮らしとの正の相関で[プライバシー、寝転べる、庭が見える]、負の相関で[団らん、絵や写真を飾る]が強いことが見出された。
- 3) 和室の構法との関係では正の相関として[畳の部屋、柱が見える]が強く、負の相関として[家具がある、床が見える]が見出された。
- 4) 和室とイメージ及び構法のまとめとの関係では正の相関として、[畳がある、柱が見える、明るい、開放性]の順で強い関係がある。

要約すると現代の和室とイメージされている部屋は、以下の様な特徴を持つ(定義)と考えられる。

【畳の部屋で柱が見え開放的でプライバシーがあって寝ころべて庭が見える部屋である。】

問題としては、イメージで和室が開放的でない方向と、「広い」、「明るい」の評価で正負が一致していない点は、値は大きくないとはいえ解釈が困難であることである。

研究検証の点では、研究の計画及び分析作業から、課題として①今後の作業になる因子分析の検証と調査対象データの比較が不十分である。②研究の入り口の課題として、結論を導く実験計画の準備が不十分であった。調査対象者の選択や写真刺激の計画が挙げられる。

(2) 研究の考え方の確認

本研究は、以下の3点の性格を持っている。今後研究を進める上での参考のために、研究の性格について明らかにした。

- 1) テーマ「和室」の未来を探る予測的な研究。
- 2) 社会データからリアルな和室像を探求する研究。
- 3) 国粋性や右翼性の特徴がない研究。

実態調査による建築計画の法則を探る研究に近くリアルな実態を実証している。本研究は、権威的な歴史資料による研究ではないが、現在から未来の時代に潜在していく事実を顕在化する研究である。

トレンド式の実証研究とは異なる方法に立っている。

そのために、過去・未来の時間軸を明示していないので和室を現在で設計するには有用になる可能性がある。設計の仕方のような決定論を導く実証的な研究は、成果があまり多くない。実証的な研究は、客観性の条件を重視し小問題にこだわることや、客観性にこだわり有用性を生み出しにくい。本研究の成果は、創造行為としての設計における自由と必然が混在するような示唆になったことは興味深いと思う。建築事例から建築計画的な示唆を得る多くの研究に対して市民の意識にある建築像を分析して有用なデータを得るものであり、実体の建築からの示唆とは異なるリアル感があると感じる。

しかし、建築計画的な目標として和室を対象にする点で、過去の日本の伝統、民族性や国粋性を強調しており逆行的とする否定的な意見があるかもしれない。しかし、和室は消滅しつつありながら多くの市民の住宅には継承維持されており、住宅ストックには、70~80%の和室があるという。十分な調査が無いが戸建ての、新築住宅では、特徴を変えながら和室が内蔵されているという。この意味で[和室]をテーマとする研究は、時代を逆行させるのではなく次の社会に存在意義があると考えられる。

謝辞) 研究趣旨をご理解いただき調査にご協力いただき有り難うございました。以下に御名前を記して謝意を表します。
日本大学生産工学部山岸研究室の学生、NPO ちば地域再生リサーチ「ニコリコ」主婦、千葉大学学生・教職員、および千葉県横芝光町市民・役場のみなさま

注)

1) 人間の刺激と対する反応の関係を探求する心理学の手法。以下創始者の論文参照。Charles Egerton Osgood (November 20, 1916 – September 15, 1991) was an American psychologist who developed a technique for measuring the connotative meaning of concepts, known as the semantic differential. A Review of General Psychology survey, published in 2002, ranked Osgood as the 40th most cited psychologist of the 20th century
https://en.wikipedia.org/wiki/Charles_E._Osgood

2) 田邊泰：住宅雑俎, pp23-26, 彰国社, 1946

3) 日本建築学会特別研究委員会「和室の世界遺産的価値に関する研究委員会」(2017~)では、和室の世界遺産的価値を研究している。

参考文献)

1) 小木曾定彰, 市川裕道, 宮田紀元: 居間の雰囲気因子構造, 日本建築学会論文報告集号外, 昭和42年10月 p612

2) 服部啓生, 森本博之, 永井正毅: 「インテリア写真サンプルの検討」, 日本建築学会大会学術講演梗概集(北陸), 1992年8月, pp145-146

3) 乾 正雄: 視環境の評価, J.Illum. Engng. Inst. Jpn. Vol.54 NO.11 1969, pp624-631